
イズマイン

ハルシオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イズマイン

【Nコード】

N8230U

【作者名】

ハルシオン

【あらすじ】

超能力を持った兄貴と、腕力しか取り柄がない弟（主人公）の戦いを描きます。

ストーリーは実際に起きた事故をモチーフにしていますので、閲覧に若干の注意が必要かもです。

アメブロからの転載です

1・風人 風神

親の力を借りて入学した高校。
目的は一つ。

俺は兄を超える。

1・風人 風神

「ひさしぶりだな、トム」

入学式早々、ナギに呼び止められた。

我が兄は二年生でありながら、この学校の生徒会副会長の座についている。

成績優秀で人望も厚く、女子生徒や教師達からの人気も高い。

俺は昔から兄が嫌いだった。

ナギは自分のことを神様か何かだと思っている。

出来ないことは何も無いという風にいつも自信に満ち溢れている。

そして常に結果を出してきていた。

隣で比較され続けてきた俺は、みじめだった。

「トムがこの高校に受かるとは思ってなかったよ。勉強がんばった

んだな」

にこやかに笑みを浮かべた顔がまた腹立たしいので、俺は嫌味たっぷりにこう返した。

「親の会社と提携してる私立高校だ。バカでも入学できるよ」

「そうそう、俺たちはバカ兄弟だ。親の威光は輝いてる時に使わないとな」

…口喧嘩で勝てる相手じゃない。

俺は本当のバカだけど、ナギは違うんだから。

遠くからナギを呼ぶ声が聞こえる。

金髪、そして巨乳というのが素直な第一印象の女子生徒だった。

一枚のプリント用紙を眺めながら二三応答した後去っていった。

「何を話してたか気になるか？」

俺は無言で答えた。

ゴホンと咳払いをしてからナギが言う。

「教えてやるさ。入学式で執り行う新入生歓迎セレモニーの打ち合わせだ」

クツと親指を立てた方角に「ハリケーン」が見える。

ここで言うハリケーンとは台風のことではない。

父の会社が開発した単独騎乗用戦闘兵器「ハリケーン」。

先の大戦で、戦場を風のように駆け抜けたことからこの名が付けられた。

学校に置いてあるものは戦闘機能を排除した低スペック機だが、時速40kmで走る鉄の塊だから危険である点は否めない。

「だからメンテナンスも兼ねたテスト運転をしてる最中なんだ。万一入学式で暴走でもしたら一大事だからな」

計5機のハリケーンがゆるゆると動いているのが見える中、黒い煙を吐きながらぐるぐる回っているハリケーンが一機。豆粒ほどの大きさに見えていた5機だが、その機体だけは握り拳大の大きさに見える。

つまり接近してきているのだ。

俺は素直に感想を口にした。

「今まさに暴走してんじゃねーのか？」

その通り、ハリケーンの一機が暴走していた。

騎乗者の操作ミスか機体のアクシデントかは分からないが、時速40kmで走る鉄の塊が俺とナギ目掛けて接近している。

とにかく避けなくてはならない。

しかし予想外、俺の後ろでは先ほどの女子生徒が腰を抜かして座り込んでいる。

俺が避けたらこの子は

「力を得よ」

俺とナギの兄弟は、父のこの言葉を聞いて生きてきた。

父は一代で世界有数の大企業を築き上げる力を持っていた。

兄は知力と、人を意のままに動かせる力を持っていた。

そして本当のバカだった俺はバカ正直に腕力を鍛えた。

走馬灯、そして正拳一撃。

ハリケーンの装甲は破損した。俺の拳も砕けた。

俺の拳は砕けたが、暴走していたハリケーンは止まってくれた。

女子生徒も無事だ。かすり傷一つない。

金属の塊を拳一つで止める男。

それがこの俺、トム・グローブマン。

才能満ち溢れる我が兄ですら持ち得ない最強の力だ。

俺はこの力で兄を超えてみせる。

眉一つ動かさず傍観していた兄を見つめ、俺は静かに決意を固めた。

2・懐古・蚕

ナギは特殊な力を持っている。

能力と言ったほうが正しいかもしれない。

人を意のままに操る能力。

自らの力を知り、人を効率的に動かす理を悟り、自分の望むままに周囲を動かせる。

その能力は催眠術や超能力の類ではなく、生まれ持った才気が成せる技術・才能と言うべき次元のものだ。

初対面の人間とも、顔をあわせて話しさえできれば操作は可能だと話していた。

年齢・性別は問わない。

その力と生徒会副会長の地位を利用した黒い噂も耳にしている。

そんな兄のことが、俺は大嫌いだ。

2・懐古・蚕

俺の趣味はツーリング。

暇な時やストレスを発散したい時、俺は自然とこいつを動かしている。

タイフーン。

父が一代で築き上げた会社の代表商品で、クルマに取って代わる乗り物。

エネルギーコストや環境問題を見据え、風力を利用して走る小型モーターサイクル。

商品名は父、タイフーン・グローブマンの名前をそのまま冠している。

タイフーンに跨りながら俺は兄を超える算段を立てていた。

ナギの力は人を催眠にかけたように操り、支配する力。

だからこそ対策を練らなければならない。

真つ向勝負を仕掛けても術中にはまってしまうだけなのだ。

だからといって闇討ちや腕力に任せた勝利は望まない。

それでは兄を超えたことにはならない。

一縷の望みがある。

「俺の力が効かない奴もいる」とナギが度々話してきたのだ。

「誰？」と聞くと、「お前」と笑顔で返してきた。

もちろん信じているわけではないが、まるっきり信じないわけにもいかない。

俺にとってナギに付け入る数少ない隙を作る要素となるかもしれないのだ。

信憑性もある。

父さんにはナギの力が及ばなかった。

小遣いを上げて欲しくて操作を試みたものの失敗続きだったらしい。

だから同じ遺伝子を受け継いだ俺にも、ナギの力をはね返す力が備わっているかもしれない。
腹違いとはいえ、たった一人の弟なのだから。

操られた側がそのことを認識することはないだろうが、俺は自身
自身がナギに操られたことはないと思っっている。
あいつも人間だ。
実の弟を操ろうなんて考えるほど腐ってはいないはずなんだ。
微かな望みを胸に秘め、顔に当たる風が強くなっていく。

一方、ナギは校内にいた。
生徒もまばらとなった放課後、窓から夕日が差している。
生徒会室の壁には、夕日に照らされて長く伸びた二つの人影が写っていた。

男は特殊な力を持っている。
人を操ることができる能力。
能力というよりは先天的な才能、体質というべきものかもしれない。
実例を挙げると跪いて奉仕をしているこの女子生徒と男は、初対面の十分後に関係を持っている。
二人きりになったところで男が命令の言葉を発する。
それだけでいとも簡単に女子生徒の最初の男になったのだ。

「ナギ・グローブマン。生徒会室で何をしてたのかしら？」

背後からの突然の掛け声にも慌てずに対処する。

「学園祭の話し合いをしていたんですよ」

「随分と先の話をするのね？ それも私を通さずにハンナと二人つきりでなんて」

「先の話だからですよ。すぐに済む話でしたし、会長に負担を掛けさせたくなかったですから。良かったら次回からは会長も参加なさいますか？」

「遠慮するわ。あなた何をするか分からないから」

そう言つて女子生徒は大げさに腕組みをする。

ブロンドの髪と大振りな胸が上下に揺れる。

「何もしませんよ。僕は紳士ですから」

「周りには誰もいないのよ、被り物をする必要はないわ」

女子生徒の声が低くなった。

腕組みの姿勢のままナギの目の前を横切り、そしてさらに低い声で続ける。

「忠告しておくわ。あなたの力は私には効かない。会長の座も、あなたには渡さないから」

女子生徒の目は、ナギと同じく鈍い光を放っていた。

2・懐古・蚕（後書き）

転載にあたり、性的な表現を抑えて書きました。

無修正版はブログにありますので大丈夫な方はそちらもよろしく）・

・
（

3・冷害×例外

読者のみんなは、一話で俺が助けた女子生徒の事を覚えているだろうか。

金髪で巨乳のあの子のことだ。

高校生活二日目からいきなりたまげた。

あの女子生徒こそがこの高校の生徒会会長、フランシスカ・シードその人だったのだ。

生徒会副会長のナギよりも権限を持った生徒。

ナギと俺の目標であり、俺たち兄弟対決の命運を握る役職。

完全無欠と思われていた兄、ナギ・グローブマンに付け入る隙がここにもあった。

3・冷害×例外

「こんにちは、弟くん」

向こうから接触してきてくれた。

これは好機だ。この場で信用を得て、ナギ相手に優位に立てるカードを手に入れる。

俺は会長様の恩人だしな。多少の融通は利くだろう。

「昨日は危ないところを助けてくれてありがとう。副会長から話は

聞いてるわ。凄い腕力ね」

グラマラスな見た目によらず可愛らしい声だ。ただど目つきや話し方がしっかりしている。

女を武器に、って感じでの生徒会会長ではないというのがすぐに分かる。

異性以上に同性から好かれそうな女性だ。

「ナギはひよろつとして頼りない感じだけど、弟のトム君は正反対。なんだか凄い」

何が凄いのかはよく分からないが、褒められているという事は分かる。

ナギの隣で劣等感を味わい続けてきた俺にとってこの言葉は複雑ながらも嬉しかった。

「触ってみてもいい？」

この言葉に一瞬戸惑った。

どこを触ろうというのだろうか。昨日今日会ったばかりの男に。

一人で慌てふためいていると、俺の了承も聞かずに右腕にそっと触れてきた。

俺は更に慌てつつも言葉の意味を理解し、それでいて顔面がとても熱くなってきているのを実感した。

「うわぁ、硬くてたくましい」

その感想の言葉とキレイでスベスベな両手の感触が心地良くて、俺はさらに嬉しくなった。

「もし迷惑でなかったら、ぜひ生徒会に入って欲しいわ。この力を学園や私のために……」

なんなんだこの女。

今まで俺が接してきた事が無いタイプの女だ。

俺は女慣れしていないんだ。

分からない、この女は一体。

あんまり俺に優しくしないでくれ。でないと俺は、俺は。

「大変、右手から血が出てるじゃない」

会長の言葉でハッと我に返った。

そして右手の甲からの出血を確認した。

「え？ ああ昨日の。大丈夫、舐めとけば治ります」

「駄目よ」

そう言つて会長は胸ポケットから絆創膏を取り出し、俺の右手に貼つてくれた。

デフォルメ化されたうさぎがプリントされた絆創膏。

そのまま俺の手を両手で握りながら、一段と可愛らしい声で言った。

「困ったことがあつたらいつでも相談してね」

「困ったことがあつたらいつでも相談してね」

頭にこびりついて離れないこの言葉。

ぐるぐるぐるぐる反芻し、そのたびに俺を悩ませる。

俺は今まで体を鍛えることしかしてこなかった。

ナギみたいにいケメンではないし汗臭い分、女なんて寄り付かなか

った。

だけどなんなんだ、あの人は。

恩人とはいえあそこまで俺を気にかけて、優しくしてくれた女性は今までいなかった。

生徒会会長、フランシスカ・シード。

フランシスカ、フラン、会長、会長様、フラン会長、フランシスカ様、フラン様…

いかに愚鈍な俺でも、これが恋であると気付くのに時間はかからなかった。

4・暗天 暗転

最愛の弟トムは現在、物語の進行役を務められる状態ではない。生徒会会長フランシスカが先に手を打ったようだ。

トムは女に弱い。

せっかく鍛えた腕力も、立場と知力を持つ者の前では意味を成さない。

だが俺には人を支配する力がある。

弟を誑し込んだフランシスカ共々、全部まとめて俺の手駒にしてやるよ。

4・暗天 暗転

新入生にとって三日目の高校生活はあいにくの雨模様だった。雨天延期はない。作戦は予定通り実行される。

「今日は午後の授業を潰して生徒会企画のレクリエーションを行う。全校生徒も教師達もみんなが体育館に集合する。

そこで生徒会会長である貴女に、制服のまま逆立ちでもして歩いてもらいましょうか。」

俺の言葉に、フランシスカの口元が引き攣る。

「全校生徒の前で、パンツ丸出しで歩けということかしら？」

察しが良くて助かる。

「お断りよ」

その回答は計算通り。

「断れませんかよ会長は。俺の力は催眠術とは違う。初対面から交わってきた会話の一言一言が貴女への命令なのです。お願いします、パンモロ歩行を敢行してください。ちなみに短パンを穿いている場合は直ちに脱いでください」

お馴染みの腕組みの体勢を崩さない会長。しかし、
「しょうがないわね」

と言つてついにスカートの下に隠された短パンを自主的に脱がせることに成功した。
これ以後は時を待つだけ。

「作戦決行前に確認しておきたい。俺の弟に近づいたのは何故だ」
会長は両手でスカートを抑えながら言った。

「決まってるでしょ。変態兄貴に対抗するための切り札よ」
「変態兄貴か。ちょっと短パンを脱がせただけでひどい言われようだな」

「この力で女子生徒を操って酷いことをしていたのね。許せない」
「誤解ですよ会長。操ったのは女子生徒だけではありません」
「変態！」

話を戻します。

「トムは俺の弟です。色目でたぶらかすのはやめていただきたい。」

ま、たとえトムが会長の味方になっても貴女ごと取り込んでしまえば問題は無い」

俺が一步詰め寄ると会長が一步引き下がる。

「変態、最低兄貴！」

「力が効かないなどとふざけた嘘について。俺の支配に抗える人間など存在しない。」

さあ時間だ、全校生徒の前で生き恥を晒して来い」

「ナギ！」

俺の背後にトムがいた。

これも計算通り。

「どういっつもりだトム。お前が惚れたフランシスカ会長様のあれの無い姿を特等席で見せてやるうというのに」

トムは会長の肩を掴んで呼び掛けている。

我に返ったらしい会長がその場に座り込み、そのままの姿勢でトムが小さく呟いた。

「ふざけるな」

その後の問答は散々なものだった。

トムは頭に血が上っているようでガーガーと大声を上げるばかり。

その中に印象的な台詞があった。

「お前の力は同じ血を分けた俺には効かない」

「実の弟を操ることができるはずがない」

俺は泣きそうになった。

小さい頃軽はずみに吐いた俺の嘘を信じていたトムが急に愛おしくなってしまった。

弟だから俺の力が通じないなんてあるはずがないし、弟だから標的にしないなんてなんと甘口思考なんだ。

力で支配するのは簡単だが、それではあまりにつまらないし可哀想だ。

そういえばトムは俺を超えるためにこの高校に入学したらしい。

それも腕っ節の力でなくあえて俺の得意分野で勝ちたいだなんて。

いいだろう、ならば俺もお前の分野で戦ってやる。

一対一の兄弟喧嘩。

有事の為に用意させたナギ専用ハリケーン「零式」に乗って、驕り高ぶった弟に絶望を与えてやる。

5・破壊 破戒

体育館では全校生徒が列を成して並んでいる。この学校の生徒会が企画運営を担当しての新入生歓迎レクレーション。

この高校は大企業のグローブマン社と提携している。グローブマンと聞いて野球用品を思い浮かべる国民はいない。機械工学の最大手株式会社で、グローブマン社の技術を扱った勉強をしないと入学を希望する生徒は多い。

新一年生達は期待に胸を膨らませながらその時を待っている。

そしてグローブマン社が世界に誇る発明品、単独騎乗用戦闘兵器ハリケーンのお目見えだ。

騎乗者は生徒会副会長にしてグローブマン社の次期社長ナギ・グローブマン。

白く輝くボディの特注品「零式」が館内を風のように駆け抜ける。

湧いた歓声は二つの意味を持っていた。

「流石はハリケーンだ、凄い！」

「ハリケーンの前を生身で駆けていた男は何者だ？ とにかく凄い！」

「トム、今なら謝れば許してやるぞ」
俺の制止を振り切ってトムは逃げる。
ハリケーン零式の攻撃をかわしながら外に出る。
外は雨。

図解が無いため分かりにくいのだが、ハリケーンは諸君らの想像よりも小さい乗り物だ。

騎乗者を含めても高さは四メートル程度。

そして安全設計ではあるがコクピット部はオープン。

つまり雨天時の騎乗者は雨ざらしだ。

何が目的で弟はハリケーンを雨の元へ誘い出したのか。

「雨水によるショートを期待してるんじゃないよな。嵐の名前を冠する機体に水は効かないぞ」

トムは黙って息を整えている。

「それとも俺自身へのチェックか。雨に濡れさせてコンディションを奪う気か」

トムは何も言わない。

「繰り返す、謝れば許す。零式は一話で砕いた機体とは装甲・スピード・パワー全ての面でポテンシャルが違う。生身では勝てない」

「お前の目的は何だ」

ようやく口を開いたかと思えば、見当違いな質問が出された。

「皆を騙して、女の子にあんなことをさせて、それで何が得たいんだ」

トムのくせに俺に説教をしようというのか。

「理由なんて簡単だ。俺はサディストで、それ向きの力を持っているから使ってるだけだ」

「ふざけるな。お前の私欲で利用された人達の気持ちを考えたことがあるのか」

トムのくせに。

「お前こそふざけるな。他人の気持ちなんて一々考えていたら、どうやってこの力を使えというんだ。

足が速い者はオリンピックで活躍する。

容姿が美しい者はテレビに出演して賞賛を浴びる。

俺の力も同じ才能なんだ、素質なんだ。そして人生に次はない。この力を持って生まれてくるナギは俺しかいないんだ。

俺の力は俺のものだ。俺の為に使って何が悪い！」

つい熱くなって大声を出してしまった後で、ようやく気がついた。トムは、生徒会副会長の俺の立場を守るために雨の下に誘き出したのか。

雨の音で声をかき消すために。

トムが笑っている。

「頭が良いのも考え物だな。なぜ外へ出たのか分かってるよな。そしてお前はもう俺を倒すことは出来ない」

トムの言うとおり。

力を使うなり、ハリケーン零式で蹴散らすのは簡単だ。

しかし俺はもう負けを認めてしまっている。

自分のためだけに力を使い続けてきた俺が、他人に施しを受けてしまった。

しかもその相手は脳みそまで筋肉でできていると思っていた出来損ないの弟だった。

絶対の自信があった知力戦に追い込まれ、まさかの敗北。

「まだ終わりじゃない。腕力でも俺が勝つ」

呆気にとられうなだれていた俺は、走って接近中のトムに対応できなかった。

飛び蹴り一撃。

ハリケーン零式は吹っ飛び尻餅をつき、俺は宙に投げ出された。

6・祭政 再生

この島国には神々を信仰する文化が根強く残っている。

”私”は神様なんてものの存在は信じていない。

だから「拝む」という行為が理解できない。

祭りの行事で神を拝むのは間違っている。祭りの準備で頑張った者達を激励すべきだ。

何もしてくれない神様なんて必要ない。

6・祭政 再生

雨水を全身に浴びるナギに条件を二つ突きつけた。

まずはイベントを他の者に任せること。

昨日の今日で立て続けにハリケーンの不備を出すのは会社のイメージダウンに繋がる。

跡取り息子である俺達の面子もあるが、父の名前に傷をつけることだけは避けなくてはならない。

ナギは動かさせそうな雰囲気ではないし俺はハリケーンの操縦が苦手だ。

フランススカ会長に頼んで代理を出してもらえばいい。

二つ目の条件。

それはまだ言わないでおく。
俺の力による支配を持続させるためにまだ言わない。

仰向けに寝転がりながらナギが言った。

「雨が降らなかつたらどうしていた？」

「声が聞こえないくらい遠い場所で戦っただけさ。雨は偶然降ったんだ」

「いつからこの作戦を考えていた？」

「高校入学したその日の晩。考えだけなら四・五年前から」

「一人で考え付いたのか？」

「内緒」

「俺をどうする？」

「内緒」

質問に答えるのが面倒臭くなったので、俺から聞きたかったことを一つ。

「ナギはその力で何がしたかったんだ？」

「エロいこと」

「それは手段だろ。相手に屈辱を与えることが究極の支配だって言っただじちゃん」

「俺はバカだから、将来のこととか関係なくその場の感情で生きたがるんだ」

「それは悪いことじゃないよ。けどやっぱり、自分さえ良ければ良いという考えは間違ってると思う」

「言っちなよ。あんな形で思い知らされたからこうして頭を冷やしているんじゃないか」

雨足が弱まってきた。

ナギはきつと、明日以降も支配の力を使って生きていくだろう。使わざるを得ない力なのだ。

顔は常に相手に見られているのだから、自らの意思に限らず力は放出され続ける。

自分の頼みごとがすべて実現する世界は魅力的で刺激的で悲しい世界。

血を分けた俺には支配の力はおろか、対抗する力すら与えられはしなかった。

だからこそ俺は別の力を手に入れる必要がある。

「俺、生徒会に入るよ」

ナギは無言で答えた。

雲の隙間から光が差し込んでいた昼下がりに。

神様なんてものはない。

では存在したとして神様とはなんだ。

母を奪い、姉を奪い、姉の体に宿る命まで奪い去ったあの会社を神は生かすというのか。

ふざけるな。

絶望の底にいた”私”に生きる力を与えてくれたのは、人だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

6 祭政 再生（後書き）

ひとまず第一章、完とらうじやうだ。

7・社会 会社（前書き）

いちお、第二章開始のお話です。

7・社会 会社

人生とはなんだろう。

そして人の命とはなんだろう。

”私”には生きる目的がない。

7・社会 会社

入学式から一週間が経った。

高校生活にも慣れ始めた今日、俺は生徒会室を訪れていた。

俺は兄に勝った。

でもそれで終わらせてはいけない。

ナギのやり方は間違っているけど、正しい側面もあった。

操られている側の人間は絶対的な力の元で安心感と充足感に満たされている。

俺にはそんな力はない。

だから俺は別の方法でナギの上を目指す。

ここから俺の物語の始まりなんだ。

ナギはどうなったか。

ハリケーンから落下した時の衝撃で腰を痛めて休学している。一度だけ部屋を訪ねてみたが、学校の女子生徒達で溢れ返っていた。相変わらずの人気ぶりだ。俺にとっても彼女達にとっても真実は話さない方がいい。

「生徒会室を訪れたのは、この二点について会長に話を聞きたかったからです」

「生徒会への参加とナギの処分についてね」
椅子から腰を上げてお馴染みの腕組みをするフランシスカ会長。不安だった。

生徒会会長から直々に誘いを受けたとはいえ俺は一年生だ。レクレーションでの兄弟喧嘩も、全校的にはデモンストレーションの一種という扱いになっている。俺の立場は依然ただの新一年生のままなのだ。

「ただの一年生ではないでしょ。

この学校を支える大企業の跡取り息子だもの。
トム君の兄貴だって表向きは極めて優秀な生徒だし、立派なお墨付きだわ」

「血縁にこだわりますね」

「そういう生徒が多いってことよ」

以前話したとおり、父は機械工学最大手の株式会社を立ち上げた有名人だ。

メディアへの露出も多い。

その父から学校に電話が入ったらしい。

ハリケーンの動作不調および愚息の監督不行き届けについて。

この順番どおりにお詫びの言葉を発したらしい。

「もうすぐ一年よね…」

神妙な面持ちでこう続く。

「トム君にとって、あの事故が起きた後で何か変わった？」

昨年の4月25日、グローブマン社は重大な事故を引き起こした。風速四輪駆動車「タイフーン」に使用される小さな部品を製造する子会社。

その家族及び従業員の命を事故で奪ってしまった。

まだ学生である俺は大して深刻には考えていなかった。

所詮は大人達が起こした事故。

代表取締役社長の息子とはいえ子供の俺には関係ないって。

一度だけ父に連れられて、その子会社の家族の下を訪ねたことがある。

小さな会社で家と工場が併設されていた。

それ故に家族が二人、正確にはお腹の中にいた妊娠三ヶ月目の赤ん坊も含めて三人の命が失われた。

生き残ったのは子会社の代表である父親と、学校で家にいなかった次女の二人。

顔を合わすことはなかったが、次女は俺と同じ年だった。

8・病み 闇

平凡な家庭に生まれた。

父は小さい会社の代表。

母はその手伝い。その縁がきっかけで結婚し、姉と私を産んでくれた。

不況のあおりを受けて父の会社が傾きかけた時期があった。

その時に合併の話を持ち込んできたのが機械工学の最大手、グローブマン社。

合併という名の吸収であったが家族を守るには他に手が無かったらしい。

一年前、母と姉はグローブマン社に殺された。

8・病み 闇

「ここだけの話、まるで実感がありません。今でも他人事のように考えています」

フランススカ会長の問いかけに対し、グローブマン社社長の次男である俺は正直に答えた。

もちろん公の場で言うべき発言でないことは理解できる。だから前置きを入れた。

会長は神妙そうな顔のままだった。

俺はナギの意見が聞きたくなつた。

あいつは長男だから、小さい頃から次期社長と呼ばれることが多々あった。

俺よりも会社に深く関っているナギはあの事故についてどう考えているのだろうか。

なにかアクションを起こしたりしてるのだろうか。

見舞いに行くのは腹立たしいので電話で確認をとることにした。

ナギは電話に出なかった。

代わりに違う人がでた。

若い女性の声で、酷く慌てた様子だった。

話しぶりからナギが入院している病院の看護師であることが分かり、弟のトム・グローブマンだと名乗ると落ち着きを取り戻したようだった。

そしてその後の会話内容の衝撃は、多分一生忘れない。

「ナギが刺されて意識不明」

様々な思いが逡巡する中で、俺が病院に着いたのは午後4時過ぎ。ナギは既に手術室に運び込まれていた。

赤いランプが点いた部屋の前でうろついたり座って考え事したり。

短くて長い時間が経ってからランプが消灯し、白衣姿の男達が手術室から出てきた。

そして俺がナギの弟であることの確認をとってから、宣告が下された。

4月14日午後4時56分、ナギ・グローブマン死去。
享年17歳であった。

9・不治 不時

俺は目を疑った。

ドクターに通された手術室の中で見たのは、手術台の上で林檎を丸かじりしているナギの姿だった。

9・不治 不時

俺は冷徹に徹しまくって口を開いた。

「死んだはずじゃなかったのか」

ナギはけるっとした態度で答えた。

「死んださ、表向きにはな」

ナギが言うには何者かに刺されたのは本当。

事実、一時的に意識不明の昏睡状態に陥っていたという。

並の人間なら死んでいてもおかしくない状態だったが、溢れ出る才能を持つ自分が死ぬことを神は認めなかったのだとか。

意識が薄れる直前に犯人に対して例の力を使い、最悪の状況は免れたのだとか。

今度は真剣な顔で口を開く。

「冗談はそこまでいい。で、お前を刺した犯人は誰なんだ」

その空気を察してかナギが初めて真面目な顔つきで回答をよこす。

「ソニア・リンドバーグ」

「誰？」という表情で返すとナギが言葉を続ける。

「一年前の爆発事故で死んだ会社の遺族様だよ」

その言葉を聞いたとき、俺は全てを理解できた気がした。

「お前と同じ年の少女、ソニアは憎しみに満ち溢れていたよ。

母と姉を奪われ、家や財産も奪われ、生き残った父親と自分の未来さえも奪われたってな。

だから捕まることを承知で病院にまで来たんだな。

自分と同じく家族を殺して、社長である父さんに同じ思いを味あわせたかったってとこだらう。

だから今日は俺が帰らせた。

明日はお前のところに来るぞ」

あの少女にそんなことがあったのか。

無意識的になのだらうか、そんなことは今まで考えたことがなかった。

家族を失うということがどんなことなのか分かっていないはずなのに。

ん？

今なんて言った。

「明日はお前のところに来るぞ。大事な事なので二回言っておく」
俺は固まった。

なぜなんだ、なぜそんな危険人物が明日俺のところだ。

「俺の力で帰らせた時についてに命令したからだ。『もう俺を襲うな、弟を狙ってくれ』って」

真つ赤に腫れた頬をさすりながらナギが言った。

「考えてもみる。」

俺は被害者だがソニアも被害者だ。彼女だけ警察に捕まるなんて悲しい結末は見たくない」

よくもまあこれだけ偽善的な台詞が出るもんだと斜に構えながら聞いていた。

四日前に蹴り飛ばしてやったのが効いてるのか。

「どの道俺は入院生活だ。」

流石に二日続けて同じ病院で刃物を振り回す馬鹿はいない。

そして俺のことを殺し損ねた。

命令に関らず、次に狙われるのはやっぱり弟のお前なんだ。

そして対策があるから念押しで『お前を狙え』という命令を付け加えた。

今からそれを説明する」

子供時代、よくナギの戦略ゲームごっこに付き合わされた。

あまり良い思い出はないが、こうなってしまった以上話ぐらい聞いておこう。

もう片方の頬を腫れさせる準備はできてる。

生き残るための決意もだ。

10・会社「下位者

世界は理不尽で出来ている。

神は存在しないんだと皆分かっている。

だから人々の手で新しい世界を創ったはずなのに。

世界はいまだ理不尽なままだ。

10・会社「下位者

ひさしぶりに兄、ナギ視点で物語を展開させていただく。

憎しみが募ってナイフで俺を刺した少女、ソニア・リンドバーグの対処は愛する弟に任せた。

作戦の全貌は昨夜の内に伝えてある。切り札も渡しておいた。

俺はその間にもう一人の敵を相手にしなくてはならない。

「そこにあんたのことだよ」

俺の呼びかけに応えるように扉が開き、一人の男が入ってきた。

白衣を着ているがこの病院の医師ではない。

白縁のメガネをかけて、痩せてんだが筋肉質なんだか分からない顔の肉質がキモかった。

眉と目とメガネをしかめながら男が言った。

「やっぱりここにいたんだね。しかも生きてる」

俺は立ち位置を変えないまま、というか怪我で動けないのでベッドの上から返した。

「俺は表向きには死んだことになってるんだ。そう扱う様お願いしたからな。」

にも関わらずこんな場所に来るなんて、早くも当たりか」

厳密には面会謝絶状態として話を通してている。

しかし実際には誰でも入ってこれるように施錠はしていない。

「社会的に、少女の家族は二人死んだことになっている。

少女の母親と姉だ。

しかし真実はそうではない。

少女の姉は妊娠していた。三ヶ月目だったからカウントされていないだけで、少女の家族は三人死んだんだ。

そして結婚を目前に控えたその姉と付き合っていたのが…」

「いかにも」とでも言いたげに眉と目をしかめてみせた。

「よくもマリアの命を。」

私達は本当に愛し合っていたんだ。

二人きりでの旅行も計画していたんだ。将来のことだっていっぱい話し合おうって。

絶対に許さない」

男がゆっくり近づいてきた。

俺はうつむきながらも相手を見据えて口を開いた。

「許さなくて構わない。」

許せなくて当然だ。

しかし復讐なんて形で納得できるのか。

わざわざ罪を被る必要は無いだろ」

「小僧に愛する人を失った者の気持ちが分かるのか。いっばしな口を利くな」

男の歩みは止まらないので再度忠告した。

「あなたがやるうとしてるのは正義じゃない。ただの逆恨みだ」

「だまれえ！」

俺は首を絞められていた。

「復讐なんて大それたものじゃないんだよ小僧。」

こうでもしないと爆発してしまいそうなくらい我々は追い詰められているんだ」

両手の握力が弱まることはない。

息ができない。

意識が朦朧とする。

ただでさえ血が足りてない状況でこれはまずい。

俺の力による説得では止まらなかった。

これだけは使うまいと考えていたが、止むを得ない。

俺は左手に握り締めていたスイッチを押した。

これが合図。

ベッドの下やロッカーの中で待機していた俺の下僕達が一斉に飛び出してくる。

数で押さえつける。俺を縛る両手を引き剥がし、男を拘束する。ものの十四秒。

これで形勢逆転である。

「人はいつか死ぬ。

あれは事故なんだ。

グロブマン社も手助けしている。

人は苦しみや悲しみを乗り越えて生きていかなくちやいけないんだ」

なんてことは立場上、口が裂けても言えない。

俺は凄くありきたりな言葉だけかけて帰らせた。

しばらくは俺達を襲うことがないようにとも伝えて。

行き場の無い虚しさがいっぱい残った。

俺の力は苦しんでいる人一人救えないのか。

力でねじ伏せて、俺の主張を押し付けることしかできない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230u/>

イズマイン

2011年11月21日19時31分発行